

2015年4月5日川越教会

## 死者の復活

加藤 享

### 【聖書】コリントの信徒への手紙Ⅰ 15章 35～49節

しかし、死者はどんなふう复活するのか、どんな体で来るのか、と聞く者がいるかもしれません。愚かな人だ。あなたが蒔くものは、死ななければ命を得ないではありませんか。あなたが蒔くものは、後でできる体ではなく、麦であれ他の穀物であれ、ただの種粒です。神は、御心のままに、それに体を与え、一つ一つの種にそれぞれ体をお与えになります。どの肉も同じ肉だというわけではなく、人間の肉、獣の肉、鳥の肉、魚の肉と、それぞれ違います。また、天上の体と地上の体があります。しかし、天上の体の輝きと地上の体の輝きとは異なっています。太陽の輝き、月の輝き、星の輝きがあつて、それぞれ違いますし、星と星との間の輝きにも違いがあります。

死者の復活もこれと同じです。蒔かれるときは朽ちるものでも、朽ちないものに復活し、蒔かれるときは卑しいものでも、輝かしいものに復活し、蒔かれるときには弱いものでも、力強いものに復活するのです。つまり、自然の命の体が蒔かれて、霊の体が復活するのです。自然の命の体があるのですから、霊の体もあるわけです。「最初の人アダムは命のある生き物となった」と書いてありますが、最後のアダムは命を与える霊となったのです。最初に霊の体があったわけではありません。自然の命の体があり、次いで霊の体があるのです。最初の人土からでき、地に属する者であり、第二の人は天に属する者です。土からできた者たちはすべて、土からできたその人に等しく、天に属する者たちはすべて、天に属するその人に等しいのです。わたしたちは、土からできたその人の似姿となっているように、天に属するその人の似姿にもなるのです。

### 【序】十字架の死

**イエス・キリスト**は、過越しの祭の金曜日の朝9時に十字架につけられ、午後3時に息を引き取られ、墓に葬られました。しかし3日目の日曜日の朝、**墓より復活されて**、弟子たちにご自身を現されました。私たちはその復活を記念する礼拝を守っています。

十字架にはり付けられたイエス・キリストを、人々は口々に罵りました。「人を救ったのに自分を救えないのか」「今十字架から下りて来い。そしたら信じてやろう」「自分を救え!」「自分を救え!」結局、私たち人間の第一の関心事は**自分の救い**なのです。自分がひどい目にあうと「神も仏もあるものか!」と信

心を捨ててしまうか、別の神・仏を見つけて縋り付こうとします。

午後3時ごろ主イエスは大声で叫ばれました。「**わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか**」そして息を引き取られました。太陽も姿を消し、全地が暗くなった中で、人々からだけでなく、父なる神からも見捨てられて、**惨めさの極み・絶望的な死**を遂げられたのでした。

## 〔1〕死の孤独

**人は皆死にます**。死だけは誰も避けることが出来ません。しかも自分がどのように死んでいくのか、また死んだらそれからどうなるのか、自分で死を味わってみるまでは分からないのです。私たちは、自分の**死の実体、真相**が分からぬままに死に臨んでいきます。静かに息を引き取ったと見えても、本人の心の中は他の誰にも分かりません。

「**主イエスほど死を恐れた人はいない**」と宗教改革者マルチン・ルターは言っています。そうです。主イエスは逮捕される直前に、ゲッセマネの園で長い祈りの時を過ごされました。主は**悲しみもだえて**弟子たちに言われました。「私は**死ぬばかりに悲しい**。ここを離れず、私と共に目を覚ましていなさい」ご自分の**苦難の死**を繰り返し予告してこられた主です。死ぬ覚悟は十分に出来ておられたはずなのに、悲しみと恐れと苦しみに**悶えて**おられます。どうしてでしょうか？

私たちは幼い時に、嘘をつく人間は死んでから地獄で閻魔大王に舌を切り取られるとおどされて育ちました。しかし主イエスほど神を敬い、人を愛する生涯を送って来られた方はいません。誰よりも**天国が保障されている**お方ではないでしょうか。釈迦や孔子以上に**平安な大往生**を遂げられるお方ではないでしょうか。それが死を間近かにして、釈迦や孔子とは全く異なり、**死の恐れ**に激しく襲われておられるのです。しかしここにこそまさに、**主イエスが救い主キリストである**こと、同時に私たちが見過ごしている**死の真の姿**が明らかにされているのです。

聖書は「初めに、神は天地を創造された」という宣言から始まります。神さまから創られた最初の夫婦**アダム**と**エバ**は、**死のない楽園**に暮らしていました。しかし神さまの言葉を見捨て、**善悪を判断する木の実**を勝手に食べてしまいました。自分の判断で思うままに行動しようとし始めたのです。私たちが世界の創造主である**神の言葉(楽園のルール)**を見捨て、各自が勝手気ままに行動すれば、他の人との間に**衝突と争い**が生じるのは当然です。この**罪**の故に**平和な楽園は失われてしまいました**。そしてアダムの家庭で、兄が弟を殺すという最初の**悲劇**が起こりました。

神を捨てた家庭に、**罪**と**罪の結果である死**がもたらされたのです。神を捨てることで神と断絶し、神から捨てられて死がもたらされた——すなわち私たち人間は、**神を捨てて罪を犯し、神に捨てられて死を招いた**と申せましょう。

**いじめ**で、子どもたちが自殺に追いやられます。川崎の中1殺害事件も、親や大人とのかかわりを**自分から断ち切った少年仲間**で発生しました。ひどくいじめられても仲間外れにされることを恐れ、その仲間によって殺されてしまいました。大人でも家族・友人・世間から見捨てられて孤独と絶望に陥り、身を滅ぼします。**見捨てられることは死ぬほど辛く、恐ろしいこと**なのです。

またたとえ親密な愛の絆に恵まれた生涯を送って来ることが出来たとしても、死ぬ時は皆一人になって死んでいくのです。人との絆を引き裂かれる淋しき、悲しみはどれほど深いものでしょうか。**死は私たちを全く孤独にします**。全てから引き裂かれて 死んでいく——これが**死の姿**なのです。

**十字架の上で主イエスは全く孤独でした**。誰一人助けくれません。**神さまも沈黙して**助けの手を差し伸べて下さいませんでした。どうしてでしょうか？それは主イエスが、私たち**人間の罪とその罪がもたらす死を、わが身に引き受けて下さった**からにほかなりません。神を捨てて罪を犯し、その報いとして死がもたらされるという私たち**人間の姿**を、神がイエス・キリストにおいて、はっきりと**お現わしになった**からです。

こうして、**神**がご自分を現すために、**人間となられて**この世に来られた**イエス・キリスト**が、その死に於いても、一人の人間として、**死の真相を現しつつ死なれた**のでした。

## 〔2〕共にいます神

しかし、もう一つ大切なことがあります。それは主イエスが、神にも見捨てられたと思える**絶望的な死の最中**にあってもなお「**わが神、わが神、なぜわたしを？**」と、神さまに向かって叫んでおられる姿です。これは主イエスが**死の最中**に於いてもなお神さまを見失わず、**神さまを身近に覚え続けて居られたこと**を現しているのではないのでしょうか。そして神さまも**十字架の上の主イエスと共に居られた**のです。

主イエスの十字架刑を執行して、その死を一部始終見つめていた**ローマ兵の隊長**が、息を引き取られた主イエスの姿を目の当たりして、思わず声を出してつぶやき

ました。「**本当に、この人は神の子だった**」不思議ですね。信仰とは全く縁がない生活をしている職業軍人です。**神の霊がその場を支配**していて、彼を感動させたとか考えられません。そうです。ですからその場に臨んで居られる神さまが、次々と**不思議な現象**を惹き起こされました。

先ず、エルサレム市内の中心を占める神殿で、**聖所と至聖所をへだてる垂れ幕**が上から下まで真っ二つに裂けました。契約の石板を納めた箱が安置されている至聖所には、**大祭司**が若い雄牛の血を献げるために**年に一度**しか入れません。普通の祭司たちでも入れないのです。それが**キリストの十字架の死**によって、誰でもが自由に**神に近づけるようになった**のです。

また地震とともに墓が開け、既に葬られていた信仰者達が眠りから覚め、主イエスの復活の後で墓から出て来て、多くの信者に現れました。これは主イエスが世の終わりに再び天より降ってきて、永眠者を含めて全ての信仰者を天に連れていって下さる**終末・再臨の予告**でしょう。

更に驚くべきことには、全会一致で主イエスの死刑を決議した最高法院の議員の中から、**アリマタヤのヨセフ**が**勇気**を出して総督ピラトに主イエスの遺体を引き取ると申し出たのです。彼は高価な**亜麻布**を買い、十字架から主の遺体を降ろして亜麻布で巻き、自分のために用意していた**新しい墓**に納めたのでした。高貴な方にふさわしい**丁重な埋葬**です。恐らく彼は大祭司や議員仲間から裏切者扱いを受け、厳しい制裁を受けることになるでしょう。それなのに彼はどうして？これもまた、主の十字架に共に居て下さった**神さまの霊**がもたらした不思議な働きの一つではないでしょうか。

一方勝利したはずのユダヤ教指導者たちは、イエスが予言通りに復活するのではないかと、**怯え**ました。そして翌日の土曜日、安息日にも拘らず兵隊を動員するという律法違反を犯して、墓を厳重に守らせました。しかし三日目の日曜日の明け方に、大きな地震が起こり、稲妻のような**輝きをおびた天使**が天より降り、墓の入り口を塞いでいる石を脇へころがし、その上に座りました。番兵たちは震え上り、死人のように倒れ伏してしまいました。そして**主イエスは墓から復活**して、弟子たちにご自身をお現しになったのでした。

6時間にわたる十字架上の死の苦しみ、神にも見捨てられたと思える**絶望的な死の最中**にあってもなお、主イエスは「**わが神、わが神、なぜわたしを？**」と、神さまに向かって叫ばれました。主は**死の最中**に於いてもなお、**神さまを身近に覚え続**

けて居られたのです。神さまもまた**十字架の上**で主イエスと共に居られたのです。そして主の叫びに答えてくださいました。それが**墓の中からの復活**でした。

### 〔3〕復活の体

「**死んだ人間が生き返る**など、そんな**バカ**なことがあるだろうか」と言う人が居ます。死んでしまったらもうどうすることも出来ないという思いが強烈だからでしょう。でも、神も死をどうすることも出来ないとすれば、**死が万物の支配者**だということになります。

しかし私たちは**神さまが全能者**であり、**死**もまた**神の支配下**にあると信じます。ですから死者を再び甦らせることも当然お出来になると信じます。事実、神さまはアリマタヤのヨセフが丁重に葬ったイエス・キリストを、番兵共が警備している墓の中から復活されました。

今日の聖書はコリント教会に宛てたパウロの手紙ですが、彼はこう語ります。

「**最も大切なこと**としてわたしがあなたがたに伝えたのは、わたしも受けたものです。すなわち、キリストが、聖書に書いてあるとおりのわたしたちの罪のために**死んだこと**、**葬られたこと**、また、聖書に書いてあるとおりの三日目に**復活したこと**、ケファに現れ、その後十二人に**現れたこと**です」(I 15:3)「キリストが復活しなかったのなら、あなたがたの**信仰は空しく**、あなたがたは今なお罪の中にあることになります。」(15:17)「しかし実際キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの**初穂**になられました。」(15:20)

復活の主に出会った時、弟子たちは**亡霊**を見ていると思いました。すると主は**手足**を見せ、**焼き魚を食べて**見せて、**体を持つ復活**であることを示されました。(ルカ 24:37~43) しかし故郷に戻ろうとした弟子と夕方まで一緒に歩いて信仰の目を開かせると、さっとエルサレムに引き返して他の弟子たちにもご自身を現して居ます。**自由に空間を行動される霊の体**でもあったのです。

そこでパウロは**復活の体**について、分かりやすく説明してくれました。土の中にまかれた麦の種粒は、葉や茎や穂を備えた穀物になる体となって土から芽生える。死者の復活もこれと同じで、**朽ちる体**から**朽ちない体**に復活し、卑しいものから輝かしいものに復活する。つまり、**自然の命の体**が蒔かれて、**霊の体**が復活するのです。自然の命の体があるのですから、霊の体もあるわけです。

私たちの体は、この**地上の生活に適した体**として神さまから与えられました。

地上の生涯を閉じますと**眠り**について、世の終わりにキリストが再び来て下さる日を待ちます。体は火葬にされやがて土にかえっていきます。しかしキリストが再び天から来て下さると、**天に属する体**を与えられて復活し、天に連れて行って頂くのです。その時の体が、復活して弟子たちにご自身を現された主のお姿のように、加藤亨と誰でもが分かりながら、今の体とは違う**天に属する霊の体**を与えられるのです。

### 【結】 栄光ある体に変えられる復活

パウロは持病に悩まされる体の持ち主でした。この**トゲ**を取り除いて下さいと、どれほど祈ったかわかりません。その彼がこう言っています。「しかし、わたしたちの**本国は天**にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、わたしたちは待っています。キリストは、万物を支配下に置くことさえできる力によって、わたしたちの**卑しい体**を、**御自分の栄光ある体と同じ形に変えてくださるのです。**」(フィリピ 3:20～21)

復活は**生き返る**ことではありません。もしも今の体と同じ体に生き返るとするならば、病弱な体で苦しみ続けた人は、また同じ苦しみを繰り返すことになります。頭が弱い、力が弱いという悲しみをまた繰り返すというのでは、復活は決して喜ばしいものではなくなります。

しかし十字架の死で痛めつけられた主イエスは、天で神と共に生きる**霊の体**をもって墓の中から復活されました。そして世の終わりの時には、天から再び来て下さって、この私を**ご自分の栄光ある体と同じ形に変えて**、天に連れて行って下さるのです。何と嬉しいことでしょうか。

イエス・キリストを救い主と信じる信仰は、私たちがどのような死を迎えるとしても、十字架の主イエスと共に居て下さった神さまが、私と共に居て下さり、終わりの日には、墓の中から復活させてくださり、栄光ある体に変えて、天国に迎えてくださる祝福を、約束しています。何と有難いことでしょうか。

お祈りします。

イエス・キリストの父なる神さま、私たちはキリストの十字架に死の真相を示されて、死への恐れを深めます。しかしその死の最中にも、貴方は主と共に居られて、救いの御業を進められたことを学びました。私たちにも貴方が何時も共に居て下さる信仰をお与え下さい。そして死の先に、卑しい体をキリストと同じ栄光ある体に変えて下さる復活の希望が備えられていることを信じつつ生きる者にして下さい。救い主キリストの御名によって祈ります。 アーメン